

【別添】

審議会での各委員の主な発言

【答申用】

神河町学校教育審議会

令和8年3月

【審議会での各委員の主な意見】

1 望ましい学級数・望ましい1学級当たりの人数に係る意見

- 複式学級・過少人数の学級を容認する発言
 - ・少人数の学校があるということに納得して移住されている方もいる。
 - ・今いる長谷小の保護者は、「複式学級の解消」のためではなく、「長谷小学校という学校で学ばせたい」という思いである。
- 一定の人数がいれば少人数の学級も容認する発言
 - ・自分自身が小学生だった時のことを思い起こしてみると、1学年1学級、1学級10数人の時代だったが楽しく過ごせた。
- 一定の人数がいる学級の方が好ましいとする発言
 - ・教える立場のものとしては、一定の人数がいる方が意見も出て豊かな学び合いができ、行事等の活動の幅も広がる。
- 複数の学級があることが望ましいとする趣旨の発言
 - ・クラス替えが毎年ある学校は子どもたちがとても新鮮で、高め合いもできているという雰囲気はずっと培われている。
 - ・学年が1クラスだけだと、最後までこじれてしまい、人間関係を上手く直せないまま6年間過ごさなければならなくなるケースもある。
 - ・「子どもは未来からの留学生」と言われる。すでに今までの経験則だけでは捉えきれない社会になりつつあり、そのような時代を生きる子どもたちには、限定をしてしまうような環境に置くのではなく、「どういう力をつけたいか、つけなければならないか」ということを念頭に置きながら、学習指導要領とか様々な教育施策を踏まえた上で、環境を整備していくことが望ましい。
- 複式学級・過少人数の学級には懸念を感じる趣旨の発言
 - ・複式学級の学校では人数が少ないことから、授業の中で子どもたちが意見を出し合い、もみ合い、高まっていくということは難しい。
 - ・高学年の子がいないときは子どもたちだけの集団で遊びをすることができない。子どもたちだけで遊ぶ力、ルールを決めたりするという力もつける必要がある。
 - ・地域で大切にされている一方、同級生がいないと友達関係の中で認めたり認められたりという関係がない。
 - ・1クラスの人数の下限は1人になるが、1対1の授業を望むほとんどの保護者は、自分の子どもの特性を考えられて、ということがある。しかし、学校の先生が授業しやすいとか、子どもも過ごしやすい人数というのはやはりある。
 - ・すでに長谷小学校は複式の下限を超えており、寺前小学校も数年後には複式になるのが見えはじめているので「複式になったときには学校をどうするか」ということをきちんと明言し、決断を下していく時期が来ている。
- 学力・人間関係の観点からの発言

- ・人数が少なすぎると委員会活動などの特別活動で社会性や自治能力を育てていく際、子どもたちの力を伸ばしきれない。また学校行事も教員が入らないと成立しない。
- ・一人で学習している教科、学年では、話し合い活動とか多数の意見を聞いて分析していくという学習が成り立たない。
- ・「望ましい学級数や人数」は、学校教育として授業や教育活動の中で「学力、人間関係力をしっかりつけていくこと」、「授業をきちんと成立させること」、「いろいろな考え方を持った人が集まって対話的な学習を展開していき、その中で合意形成を図る協働的な学び」ができる条件や環境を整えられるという視点から考えていく必要がある。

2 小学校区に係る発言

○ 現状の小学校区を基本とする意見

- ・この審議会の中では「中学校同様に1つの小学校にしておこう」という意見は出ていないと認識している。
- ・それぞれのコミュニティ等の現状を考慮して、旧町に1校は小学校があった方がよい。
- ・「旧町時の学校の持ち味」を担保しつつ「教育の水準」も担保するというのを考えると、「旧町に小学校が1校」という考え方はあると思う。

○ 選択的な校区の制度を容認する趣旨の意見

- ・特定地域選択性については、旧大河内町側の2つの小学校が繋がっているようなイメージを持つ。
- ・今の地域に住みながら特定地域選択制を活用して違う校区にある学校に通わせたい、という保護者もいる。
- ・小規模特認校制度は、選択肢を子どもたちの側が持てるという点で共感する。
- ・例えば長谷小のような学校と、普通の規模の学校は旧町に1校ずつ置いて、保護者がそれぞれのメリットやリスクも考えながらどっちの学校に行かせようか決められるのがいいのかなと考える。

○ 選択的な校区の制度の課題に係る発言

- ・校区の際のところにある家が、学校まで遠いという理由で隣の校区に行くと、その校区の学校の人数が少なくなる、という問題が起きる。
- ・小規模特認校とか特定地域選択制を導入することで、長谷小に行く子どもが増えるのはいいかな、と思うが、結局全体の人数・パイは変わらなくて、分散するだけになる。集まったパイも、少子化の中ではこれからはどんどん小さくなっていく、ということも踏まえて考えていかないといけないのかな、と感じている。
- ・学校選択に関して、自由選択制とかブロック選択制は、大きな市であれば望む保護者もあると思うが、神河町の町域を考えればあまり当てはまらず、最初に除外されるもの、という気がする。
- ・神河町の現状を考えれば住所地の校区の学校に通うというのがベースになってくると思う。
- ・小規模特認校制度は確かに「複式の解消」というのが1つの目的になっていると考える

が、神河町の出生者数が30人前後という実態を考えたとき、その目的である「複式の解消」が可能なのかどうかということは、かなり不透明だな、という印象を持っている。

- ・学校選択に関しては、町としての通学サポート、安全の担保が示されないと判断が難しい。
- ・他市町の小規模特認校のケースで、市町が通学支援を用意しているというのではない。「保護者負担で通えること」を前提にしているのがほぼ全てのケースなので、公共交通を使っている通学支援の意見は当然出てくると思う。

3 小学校と中学校の連携・接続に係る意見

- ・少人数から大人数になるという中学校生活での戸惑いとか気後れ、仲間関係、友達関係のプレッシャーに配慮し、入学後1年生の間は同じクラスにする、という対応をしている。
- ・中学校入学当初は、教員は意識して子どもたちに寄り添って声をかけるなど、波に乗るまで一生懸命頑張り学級を築いていっている。そのような働きかけがあるので、子どもたちは中学校生活のスタートを無事切ることができていると感じている。多少の個人差はあるにせよ、1年生の間に大体馴染んで、しっかりと中学生活が送れるようになっていると思っている。
- ・中学校の大きな課題の1つに不登校問題がある。誰にでもある中1ギャップを少しでも解消し、小学校と中学校の滑らかな接続ができないか考え、数年前から「教えて先輩アンケート」を工夫して実施している。
- ・小中連携・接続としては、例えば防災教育やふるさと学習、コミュニティ・スクールを生かしたキャリア教育、道徳教育などが教育課程の中でできるのではないかと考えている。
- ・小中学校の職員間の連携、児童生徒の連携がある中での先生同士が関わっていくことが大事になってくるのではないかと考える。
- ・小中一貫教育とか連携に関わっていた時「同じ子どもたちを見ているのだから、小学校と中学校の先生がもっと仲良くなり、お互いもっと協力し合って子どもたちの力を伸ばしていきたい」と考えていた。
- ・小中一貫教育の導入の背景としては、「中1ギャップ」といわれる小中学校間の指導や制度の違いが主とした要因であるとした中学校入学後の不登校生やいじめの件数増があった。今ではむしろ小学校低学年からの不登校問題、いじめ問題や生徒指導が課題になっている。
- ・小学校と小学校の連携、就学前との連携などの枠組みをうまく使っていけば、もっとより良い教育ができていくと思う。その柱は、やはり「教員の授業力」を小学校と中学校で連携しながらどう高めていくのか、今の課題でいえば、「探究的な学習」や「総合的な学習」をどう充実させていくのかということが、今後求められてくると思う。

4 通学方法に関する意見

- ・子どもの数が少なくなり、子ども会が成り立たなくなっており、今後は、登校班も成り立たなくなっていくと考えている。

- ・朝の登校準備の子どもの行動をみていると、親が送り迎えをする場合は子どもの甘えが強い。しかし登校班で通学する場合は、ほかの子のことを気遣った行動をとることができているように思う。
- ・同じ区内で、学校までのわずかな距離の差で徒歩通学とバス通学が分かれるという現状がある。
- ・保護者の送り迎えについていうと、特に朝の時間帯はあわただしい上、子どもの甘えもありストレスも多く、保護者にとっては負担が大きい。
- ・体力のことを考えると、必ずしもすべてバス通学がいいとは思わない。
- ・登下校時の安全確保に関わり、熊の出没も課題となってきた。
- ・昨年は熊の出没などのこともあり、登校班に合流するまでの間一人になる子どもの保護者が非常に心配されていたこともある。
- ・安全を考えれば、スクールバスにこだわらず、子どもたち全員を、例えばコミュニティバスやデマンドバスなどで通学させるという方向にシフトしていくという考え方もあるのかなと思う。
- ・熊の件など、安全を脅かす問題だというふうに考えると、今後、全ての子どもたちをスクールバスで、ということも必要なのかなとは思う。ただ、一方で、子どもたちが歩いて登校する道すがらいろんなことを見聞きして学んでいく、ということがそがれていく、という弊害をどう捉えるのかという課題もある。
- ・学校選択に関しては、町としての通学サポート、安全の担保が示されないと判断が難しい。
- ・知っている限りで言うと、他市町の小規模特認校のケースで、市町が通学支援を用意しているというのではない。「保護者負担で通えること」を前提にしているのがほぼ全てのケースなので、公共交通を使っただけの通学支援の意見は当然出てくると思う。
- ・例えば学校統合の場合は、多くの大幅な変更が発生するので「指定する学校に通える手段を保障する」という文脈でスクールバスの準備をするということが行政の基本の対応になっていると思う。
- ・保護者が学校を選択することをベースとする場合には、行政としての保障、支援ができるかというのは、町の方で検討が必要になってくるものと思う。
- ・学校選択を実施しても、学校への送迎を保護者が全部負担する場合は、足踏みする保護者が大半だと思う。行政が「自由に学校を選択できる」とするのであれば、行政が送迎をサポートするというのがスタートラインだと考える。
- ・統合により通学距離が長くなる児童が増えることが予想される。朝の登校時間帯でも気温が高く、重いランドセルを背負っての徒歩は熱中症のリスクが高い。交通事故対策、熊対策、不審者対策など多くのメリットがあるため、スクールバスの導入をお願いしたい。保護者にとっても、送迎の負担が減り、共働きでも安心して通学させられる。
- ・学校が多くあれば、費用が多くかかる。通学費用はどうするのか。

5 その他、包括的な意見

- ・1学級当たりの最少人数、最大人数というものはあるのか、知りたい。
- ・移住して来られる方がいるのは理解できる。一方、校区の学校が小さいということで移住をためらう人もいるのではないかと思うが、そのような事例があれば教えてほしい。
- ・通学環境や特色ある行事の継続、子どもたちのケアについて、十分な検討と配慮の上であれば、小学校統合の方向性について基本的には賛成と考える。
- ・学校が統合される場合、いちばん影響を受けるのは子どもたちなので、スクールカウンセラーの活用など、サポート体制の整備をお願いしたい。
- ・特認校制度について（県内事例、制度の内容など）の詳細説明が欲しい。
- ・特定地域選択制について（県内事例、制度の内容など）の詳細説明が欲しい。
- ・学校規模として、子どもたちの社会性を育むための児童数を知りたい。
- ・1学級当たりの人数については、文科省では決まった考え方があるが、ここで議論しているのは「神河町の望ましい学級数、あるいは1学級当たりの人数」であり、校区についても「神河町立小学校の校区の考え方」ということでこの地域限定の考え方であると理解している。
- ・家族の支えがなければ、子どもも1歩前へ進めないと考えている。
- ・すでに現在の校区が決まっていて、それぞれの学校がその学校の人数で運営する状況の中で、我々委員に校区のあり方を問われても、何を話したらいいのか分からないというのが正直な思いである。
- ・校区を考えるとということだが、これまで学校を統合する中で現在の小学校区割になっている。今後、学校が統合されることがない限りは、我々委員が考えて決めることができないものと思う。
- ・「統合」ということも含め「望ましい形になるように何とかしていこう」ということに意見を出し合う方がよいという気がする。
- ・校区の議論より、通学の方法とかそれにかかる補助、安全面の担保などに焦点を当てて議論する方がよほど有益だと思う。
- ・何年か後には寺前小学校も複式にしないといけないという時がやってくると思う。長谷小も複式、寺前小も複式となり「教育環境としてどうなのか」というときには、この審議会と同じような会を持たないといけないのかなと思う。
- ・少子化が進んでいるので寺前小や神崎小でも複式学級の学年が出来たりするようになると「旧町に1校」の存続も困難だということが見えてくるかもしれない。その時にはまた考えていかななくてははいけないと思う。
- ・就学前の教育から、地域の方と一緒にあって小学校と中学校が協働し、それが中核になって学力をつけ、最終的に進路保障をするということが、子どもたちの生きる力に繋がっていくということがこれからも不易なことであると思う。
- ・大切なのはやはり「人間関係力」という社会の中で人と人との関係性の中で生きていく力であり、これが土台になって「学力」が伸びていくし、「学力」が伸びることによって「人間関係力」という力も伸びていく。2つの力を相互に伸ばしていきながら社会で自

立していく子どもたちを育てていく、よりよい社会を創っていく人を育てていくことが大切だと思う。

- 小学校と小学校の連携、就学前との連携などの枠組みをうまく使っていけば、もっとより良い教育ができていくと思う。その柱は、やはり「教員の授業力」を小学校と中学校で連携しながらどう高めていくのか、今の課題でいえば、「探究的な学習」や「総合的な学習」をどう充実させていくのかということが、今後求められてくると思う。
- 前提となる子どもの数が変わることで、この審議会で一旦出した結論とか集めた知恵というものも大きく変わってくる可能性もある。他市町でも、学校の配置についての基本的な考え方に対して一定の期限を設定しているケースが増えている。答申の中に「提言後、何年かした後に再度検討」という期限を設けるケースは実際にあり大事になると思う。
- この答申については、神河町の今後の子どもの数の変動に伴って一定期間で見直したほうがいいだろう、というご意見をいただいていると思う。区切り方には色々な考え方があると思うが、一定の年限で区切る形での答申とするのが適切なのかなという思いを持っている。
- 委員の皆さんが、他の方の意見を聞きながら課題を考え、難しい問題であることを共有化されていくことは、この会議の大きな意義であると思っている。